

## 地域子育て支援拠点研修〈鹿児島開催〉

### 《開催概要》

- 開催日：令和元年12月1日（日）10:00～16:00
- 会場：ホテルマイステイズ鹿児島天文館  
（鹿児島市山之口町2-7）
- 主催：NPO法人子育てひろば全国連絡協議会
- 後援：（社福）全国社会福祉協議会・鹿児島県・鹿児島市
- 協力：NPO法人アンジュ・ママン
- 参加人数：110名



### 〈プログラム〉

#### ■開会挨拶

奥山千鶴子 NPO法人子育てひろば全国連絡協議会 理事長



#### ■プログラム1 行政説明

「地域の子育て支援に関する施策の現状」

【説明】田村 悟さん 厚生労働省子ども家庭局子育て支援課長

##### ●地域子育て支援拠点事業の概要

在宅の子育て家庭を中心に支えていくために、地域子育て支援拠点が設置され、拡充されてきている。4つの基本事業を実施していく中で、地域の子育てに直面している課題がみえてきた。実施箇所数としては、国の目標は8,000ヶ所とし、毎年増加傾向にある。地域子育て支援拠点における多機能型支援の取組効果として、様々なメリットがあるので検討してもらいたい。



##### ●利用者支援事業

子育て家庭や妊産婦が、教育・保育施設や地域子ども・子育て支援事業、保健・医療・福祉等の関係機関を円滑に利用できるように、身近な場所での相談や情報提供、助言等必要な支援を行うとともに、関係機関との連絡、連携、協働の体制づくり等を行うものである。利用者支援事業基本型は、身近な場所で日常的な会話の中で相談を受け、個別のニーズ等を把握し、当事者の目線に立った、寄り添い型の支援である。市区町村の窓口で、保育サービスに関する情報提供や利用に向けての支援などを行う保育コンシェルジュ、特定型の配置とともに、市区町村における子育て家庭支援の機能強化を推進している。

##### ●今後の拠点の課題

調査研究事業の結果から、平日のみ開所されている小規模拠点と、多機能的な子育て支援事業を実施し、土日の開所率も相対的に高い地域の中核的な拠点とでは、必要な職員数や職員に求められる業務量、スキル、拠点が抱える課題は大きく異なっている。さまざまな課題を抱えた親子が増える今、地域

子育て支援事業が担う役割はますます重要となり、各拠点が求められる役割を適切にはたせるよう、補助のあり方を見直していく必要がある。また、職員の給与の財源の確保が厳しく、大きな課題となっている。

### ●児童虐待防止策

児童虐待については、相談件数の急増をふまえ、政府全体で取り組み、法改正事項を令和2年4月以降実施。課題として児童虐待の発生予防・早期発見の役割を子育て支援拠点が担っている。また、体罰によらない子育ての推進、相談窓口の周知・徹底が求められている。

## ■プログラム2 講義

「ガイドラインを基に地域子育て支援拠点事業の基本4事業を深める」

【講師】 渡辺頭一郎さん 日本福祉大学 子ども発達学部 教授



子育て家庭の孤立化により、親族や地域の支えが得られなくなり、子育ての負担が母親に集中しやすい。また、世代を超えた子育て経験の受け渡しが難しく、子育てに関する知識などを得るために、親は育児本やSNSに頼らざるを得ないのが、現代の子育ての特徴である。子育て家庭をめぐる経済的状況や、幼・保無償化に伴い共働き家庭が増える中、低年齢時期から保育を利用する割合が高まっており、これによって拠点やひろばの日曜日の開所のニーズが高まっている。このため、土曜日・日曜開所を開始する拠点も徐々に増えつつある。また、ひろば全協の調査によれば、自身の育った土地を離れた場所で育児を行う「アウェイ育児」が70%を超えている。地域の支えが得られず、父親不在の育児も相俟って、責任を一身に任される母親の心身の負担は大きくなる。このような要因が、産後うつや児童虐待のリスク要因になる場合があり、乳幼児育児の時期に「予防的支援」を行うことは重要である。身近な地域において、子育て支援拠点等での出会いが大切で、基本4事業の中に支援者の役割として大切な事がうたわれている。そこで顔を合わせ、同じ立場にある親同士（ピア）による互いに関わり合いの中から、あいさつや日常会話を通し、互いに打ち解け共感し、支え合う関係を作り出したり、自分らしく過ごすことのできる居場所を提供することが拠点にいる支援者の役割である。

拠点等に来ることが出来ない母親に対しても、支援者の方から出向き（アウトリーチ）、顔を合わせて丁寧にかかわり、地域の子育てを支える力と様々な視点から支援を展開する必要がある。

## ■プログラム3 パネルディスカッション

「子育て家庭の現状に応じた地域子育て支援拠点の役割」

【話題提供】 日高由美さん 高山子育て支援センターちゃいるどほうす

子育て支援室長（鹿児島県肝属郡肝付町）

松下利衣さん 鹿児島市東部親子つどいのひろばなかまっち 館長

（鹿児島県鹿児島市）

小川由美さん NPO 法人アンジュ・ママン 施設長（大分県豊後高田市）

NPO 法人子育てひろば全国連絡協議会 理事

【コメンテーター】 渡辺頭一郎さん 日本福祉大学 子ども発達学部 教授

【コーディネーター】 奥山千鶴子さん 認定NPO 法人びーのびーの 理事長

NPO 法人子育てひろば全国連絡協議会 理事長

【話題提供】 日高由美さん 高山子育て支援センターちゃいるどほうす 子育て支援室長

肝付町人口 15,237 人。人口は少ないが、支援センターは二か所ある。子育て家庭の現状として、子育ての悩みは様々あるが、「育てにくさ」が伺える場合もある。育てにくさとは、本人が感じる育児上の困難感で、親子関係に起因するものの中にある愛着形成に及ぼす影響は大きい。支援者として、ママの訴えに丁寧に耳を傾けるようにしている。ママたちはインターネットで情報を収集し情報が氾濫する中、孤立感や不安・負担感などで、時に子育てを楽しめなくなっている様子もある。



一時預かり・赤ちゃん訪問事業に合わせ、昨年度より利用者支援事業も開始したことにより、ちゃいるどはうすではニーズに対して、一つの窓口で多面的な利用が生み出されている。利用者との会話の中で悩み事を理解するとともにママの育児力を育むため、先輩ママにレクチャーしてもらうなど、一人でも安心して日常の育児が出来るようセンターと一緒に体験する場や子育てサロンを開いている。それはママの自信につながり、他のママの子育てを知り同じ不安があることにほっとされ、親が親として育っていく姿につながっている。妊娠期から行っている「ママケア」は、相談内容から専門家に繋ぐ必要性が伺えるときに、希望があれば臨床心理士との面談の場を設定する。また「養育支援ママ」を育成し、家事援助・養育援助を実施している。親ではあるけれど子どもを知らないことから始まっている育児であること、どの親にもその方の思いや考え方があり、そこを尊重し理解すると共に、課題を共有し一緒に考えていく姿勢、親同士がつながるお手伝い出来ることを大切にしている。

### 【話題提供】 松下利衣さん 鹿児島市東部親子つどいのひろば なかまっち 館長

鹿児島県鹿児島市、天文館そばの繁華街に位置する親子つどいの広場なかまっちは、平成 20 年 4 月開所し現在 12 年目を迎えている。繁華街にある為、路面電車、バス、自転車等、利便性が良い。6 階建てのビル 5 階フロアと 6 階屋上で遊具を利用し外遊びも行えることが特徴。開所は 9 時～17 時、土日祝日開所、年間休館日は年末年始の数日のみ、1 日平均利用者数 76 人、1 日従事するスタッフ数 5 名すべて有資格者で活動している。



利用者の姿としては、働く母、父や外国籍の世帯の方の利用が多数です。最近では育休中の父もおり、母のみならず広場を利用して育児する姿に時代の流れを感じる。

利用者が求めることは、同じ子育てをする人同士(ピア)の情報交換や、育児をする中で自身の子育ての話聞いてくれる人、同じ境遇にある人と接する場を求めている。その中でスタッフは、24 時間子育てする保護者と何気ない日常会話を通して信頼関係を深め、人と人をつなぐパイプ役として、利用者が安心していられる、話を聞いてくれる、声をかけてくれると感じてもらえるように、再度来て頂けるよう接することを心がけている。又、スタッフ間では情報共有を行い関係機関へ報告し、スタッフが抱え込まない様になっている。利用者支援の取組では、これまで以上に相談の幅も広がる傾向にあるため対応の拡充を行い、臨床心理士・言語聴覚士の定期的な相談日を設け実施している。地域連携では鹿児島市子育て支援ネットワーク会議(東部ブロック会議)を年 2 回実施し、拠点スタッフ・幼・保育園、認定こども園、認可外保育所、子育てサロン、地区保健師・助産師、療育施設等々、様々な子育てに携わる方々との会議を行っている。

その結果、お互いの情報交換や連携体制の確認、各施設の現状把握が行え、地域の枠、施設の種別などの垣根を越えた交流、関係づくり子育て支援の方向性の共通認識が行えている。

今後の課題として、現在は当事者からの発信を受け止めきれていない部分もあるため、きちんと受け止め、参加してみようと思える場面、きっかけ作りから仲間づくりの場の拡充を目指していく。柔軟に対応できるように、スタッフのスキルアップと人材育成に取り組んでいく。また、子どもの最善の利益に必要とされるニーズは何かと考え、拠点は親にとっても子どもにとっても安心安全なひろばであること、なかまっちに行きたいなと思ってもらえるように努めていきたい。

## 【話題提供】小川由美さん NPO 法人アンジュ・ママン 施設長

平成 16 年に豊後高田市の直営でつどいの広場「花っこルーム」開所。そこで出逢った母親たち（8 名）が平成 19 年に任意団体“アンジュ・ママン”を設立し、平成 22 年に NPO 法人アンジュ・ママンと改め、様々な子育て支援事業を地域と連携しながら活動している。また平成 30 年 4 月に真玉・香々地に拠点常設、7 月より日曜日開所。



花っこルームは、同じ建物に子育て支援課と健康推進課があり、その存在は大きく、ワンストップ拠点として、常日頃から母子保健分野とともに連携を取ることが出来ている。利用者の現状として、就労している母親が増加、移住・定住に力を入れているため社会増はあるが地縁血縁がない場所での子育て、生活をしている方が多くなったため、子育て期の保護者をピアサポートしながら共感性をもとに支えたいと思い活動している。また利用者の声を聴き、日曜開所したことで以前より拠点利用の父親が増えたことは、とても大きいと感じている。日曜開所、土日の事業については、地域の方に助けてもらい、成り立っている。

やればやるほど課題に気づき、各事業の見直しを行っている。利用者のニーズに沿っているのかを考え、丁寧に声を聴き、スタッフ自身が地域の一部となつてつながりを広げたり深めていく姿勢を持って関わることで、包んでくれる居場所を作っていけたらと思っている。

## 【バズタイム】

グループトーク、自己紹介。

登壇者への質問・これからの取り組みに求められること・私たちに変化が求められること



### 小川由美さん

Q. 今後 NPO 法人を立ち上げていきたい。行政とつながる為にどうやっていけばいいか？

A. 平成 15 年に 0. 1. 2 歳の子どもを育てる家庭にアンケートを出した結果、居場所がない、公園に行ける年齢ではない、家しか居場所がないという答えがでた。県の NPO 相談センターに相談すると、NPO の立ち上げ方を知っている方を紹介してもらった。分からないことはこちらからどんどん質問に出向いて行った。

Q. 土日の開催や人材をどう集めているのか。

A. スタッフは 25 名。細かいスタッフ配置として、土日にコーディネーターも入る。

利用者さんや、広場を知ってくれている方に声をかけたり、看護師についてはハローワークを利用したりする。

### 日高由美さん

Q. やりすぎない支援とは？利用者さんはお客様？

A. イベントめぐりなどをされるお母さんはその時は楽しいかもしれないが、支援者として本当にそれでよいのか？お母さんへプレゼント出来るものは何なのか？と考えてしまう。お母さんたちがどこで悩んでいるのかを共有し一緒に考え、気持ちに寄り添えるような顔の見える関係になれたらいいなと考えている。

Q. 利用者支援の方法の進め方、相談支援へのサポート体制は？

A. どうコーディネートすると相談者にとって最善の利益となりうるかを考え、様々な事業がある中、事業内容にとらわれずやれそうなことは関係機関への相談・連携の協力依頼を諦めないようにしている。アウトリーチの大切さも感じる。この繰り返しと積み上げが、サポート体制の力になっている様に感じる。

Q. 行政と拠点の連携の取り方は？

A. 毎月、「子育て支援定例会」・「子育て支援包括会議」を実施。日頃から互いに報告・連絡・相談を取りやすい関係づくりに努めている。拠点だけでは力量がないので保健師さんに関わってもらっていいか相談者に確認を取るようになっている。了解をしてもらうまでには時間がかかる場合もある。信頼関係の構築を大事にしつつ、保護者にとってよいタイミングかを見計って丁寧に対応している。但し、各関係機関の担当者には業務上の守秘義務があるので、本人の了解を取るより先に、情報を共有し解決や課題整理に向けた手立てを講じることを優先すべき場合も多々ある。

**松下利衣さん**

Q. 職員同士の情報共有の方法は？（顔、名前、情報の共有）

A. 保護者の同意を得て「子育て相談表」を作って情報共有をしている。

**渡辺顕一郎さん**

Q. 健診時の困りごとの受け止め方法は？

A. 私たちは発達専門家ではないから判断はできないが、心配な気持ちに共感し、寄り添ってあげる事が大切である。安易に「大丈夫」という言葉は言わない。

### 【コメンテーター】 渡辺顕一郎さん 日本福祉大学 子ども発達学部 教授

多機能的サービスの支援効果として、複数の事業を1か所で併用している方が、支援効果が上がっていることが分かった。単に複数の事業が同じ場所で実施されているだけでは不十分で、同じ場所であったとしてもそれぞれが連携していることが大切である。多機能的サービスがたとえ地域になくても、他機関との連携がしっかりとれていたら十分に役割を果たすことが出来る。

やりすぎの支援はよくないが、利用者のニーズに応えることは必要。支援の必要性を、私たちの個人の価値観で決めてはいけない。保護者が、最終的には自分の力で子どもに向き合い、社会資源を活用しながら子育ての問題を解決いけるように、自己決定を尊重し、保護者ととともに一緒に考えてほしい。

連携については、子育て世代包括支援センターが十分に機能することが望ましいが、難しいこともあり、まずは支援者同士が顔でつながっていくことが大切である。

### 【コーディネーター】 奥山千鶴子さん 認定NPO法人びーのびーの 理事長

#### NPO法人子育てひろば全国連絡協議会 理事長

地域子育て支援拠点事業に利用者支援事業基本型が配置されることで、機関連携がしやすくなった。これまで拠点が実践してきた居場所、相談機能を充実し、さらに連携を進化させて新しいニーズも拾っていくこともできるようになるなど、挑戦できる領域が広がったと思う。



### ■閉会挨拶

小川由美 NPO法人子育てひろば全国連絡協議会 理事